

日本語モダリティ覚え書き（その三）  
－ モダリティにおけるメタファーと半メタファー －  
Notes on Japanese Modality (3)  
－ Metaphor and Semi-Metaphor in Modality －

福田 一雄  
FUKUDA Kazuo

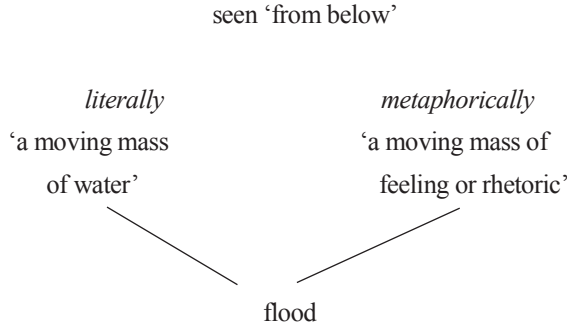
The notion of Grammatical Metaphor was introduced by M. A. K. Halliday (1985) in the theory of Systemic Functional Linguistics. According to him, Modality is realized in either of the two ways, congruent or incongruent. This two-fold distinction totally depends upon whether the relevant modalized clause is a single clause or a bi-clause syntactically. In this paper, we have identified the semi-metaphorical variant within Halliday's congruent type. By doing so, we have found that we can better capture the increasing degrees of objectivity along the following order: *The rumor must be true* → *The rumor is certain to be true* → *It is certain that the rumor is true*. Furthermore, we showed that our three-fold distinction between congruent, semi-metaphorical and metaphorical variants, can better explain shades of meaning of Japanese Modality as well as of English.

キーワード： 整合形、観念構成的メタファー、対人的メタファー、半メタファー、客観化  
Keywords: Congruent, Ideational metaphor, Interpersonal metaphor, Semi-metaphor, Objectivization

## 0. はじめに

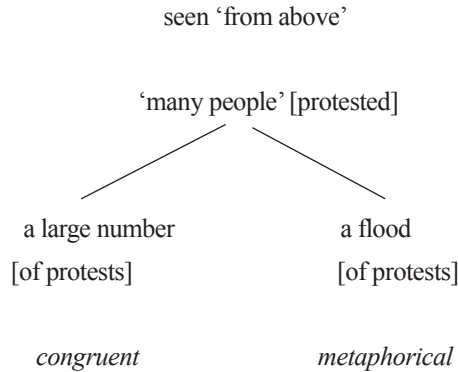
ハリデー (M. A. K. Halliday) の文法学説である選択体系機能言語学 (Systemic Functional Linguistics 以下 SFL) の中に、文法的メタファー (grammatical metaphor) という概念がある。従来からのメタファー論の中心である語彙的メタファーと文法的メタファーとの違いをハリデーは次のように図示している。

(1) 語彙的メタファー



(Halliday 1994:342, Fig.10-1)

(2) 文法的メタファー



(Halliday 1994 同上)

上の(1)と(2)の相違は、メタファーを言語の「下の層」から見るか、それとも「上の層」から見るかによるものであるとされる。福田(2016)でも解説したように、SFLの意味層は語彙・文法層の上位にある。したがって(1)の語彙的メタファーでは、まず語彙・文法層における単語‘flood’が字義的な意味かそれとも比喩的な意味かを問題にする。一方、(2)の文法的メタファーの視点は、まず言語主体と外的・内的現実世界との交渉を通して生じる意味(meaning)としての「多くの人が抗議した」が存在し、その意味層から下位の語彙文法層における言語形式の選択の仕方を考えるという視点である。

現実と一致している表現を‘congruent’（以下、本稿では、この一致形を加藤(2016)にならって整形形と称する）と呼び、そうでない表現を比喩的(metaphorical)と称している。ハリデーは比喩表現をまとめてメタファーと呼んでいる。

さらに、(1)(2)の図のすぐ後に続くハリデーの次の解説は特に注意しておく必要がある。

- (3) This is not to say that the congruent realization is better, or that it is more frequent, or even that it functions as a norm; there are many instances where a metaphorical representation has become the norm, and this is in fact a natural process of linguistic change. Nor is it to suggest that a set of variants of this kind will be totally synonymous; the selection of metaphor is itself a meaningful choice, and the particular metaphor selected adds further semantic features. But they will be systematically related in meaning, and therefore synonymous in certain respects. (Halliday 1994: 342、下線部強調筆者)

(3)によれば、「整合形」がより使用頻度が高いとか基準的であるとかは言えないとされる。場合によっては「比喻形」のほうが基準になっていることもあるということである。下線部において、「比喻形」の出現と定着という方向が言語変化の自然な流れだとしている点に特に注目しておきたい。さらに「整合形」と「比喻形」はそれらの選択自体に独自の意味があり、両者がまったく同義であるとは言えない。一方で、「一致形」と「比喻形」は意味が体系的に関係しているので、同義と言える側面を有しているとされている。

### 1. 観念構成的メタファー

文法的メタファーは、SFL の三つのメタ機能のうち、観念構成的メタ機能(ideational metafunction)と対人的メタ機能(interpersonal metafunction)に関係する。Martin (1992)ではテキスト形成的メタ機能(textual metafunction)と文法的メタファーの関係を扱っているが、それについての議論は稿をあらためることにして、まず観念構成的メタファーとはどのようなものかを見てみよう。

- (4) a. Mary saw something wonderful. (整合形：心理過程)

b. A wonderful sight met Mary's eyes. (メタファー：物質過程)

(Halliday 1994, 344)

- (5) a. In order to argue that [this] is not so, [he] simply points out that there are no synonyms in mental language. (整合形：物質過程)

b. The argument to the contrary is basically an appeal to the lack of synonymy in mental language.

(メタファー：関係過程)

(Halliday 1994: 352)

(4) (5)の整合形からメタファーへの変更においては、SFL で言う過程構成 (transitivity) 上の過程型(process type)の交替が見られる。それぞれ「心理過程」から「物質過程」、「物質過程」から「関係過程」への変化である。このように整合形からメタファー形への移行は過程型の変化を伴うことが多い。さらに(4)(5)の整合形からメタファー形への転換においては、名詞化(nominalization)の現象が見られる。(4)では'saw'が'sight'に変化している。(5)はいくつかの名

詞化を含む。‘argue’が‘argument’に、‘is not so’が‘the contrary’に、‘points out’が‘an appeal’に、‘there are no synonyms’が‘the lack of synonymy’に名詞化している。

こうした整合形のメタファー化の根本的特徴は、「より客観的」「より科学的」「より論理的」な言い回し(wording)へのレトリック的方向性だと考えられる。それは現実自体の自然な描写から、より抽象度の高い、いわば、より不自然な描写への変化である。ただしこの自然・不自然はまったく良い悪いといった問題ではないことに注意すべきである。

観念構成的メタファーに関して、もう一つ注意すべきことがある。福田(2003)でも指摘したが、観念構成的メタファーは常に過程型の変化を伴うわけではないという点である。次の例を見てみよう。

- (6) a. Why did you do that? (整合形：物質過程)  
b. What made you do that? (メタファー形：物質過程)

SFLでの物質過程の動詞は「対象になんらかの変化や効果」を与えるものであるから、(6a)の‘do’も(6b)の‘made’も、この場合、物質過程を具現していることになる。このように過程型自体に変化がないケースもある。一方、(6a)から(6b)への転換には大きな変化があることにも注目したい。それは同じ物質過程であっても、過程構成上の節要素の参与者役割に変化があるという点である。(6a)の疑問詞‘Why’は状況的要素であり、(6b)の疑問詞‘what’は観念構成的要素である。‘you’は行為者(actor)から対象(goal)に変化している。そして、(6)においてもまた、整合形のメタファー化は、「より客観的な」表現を求めての変化と言える。

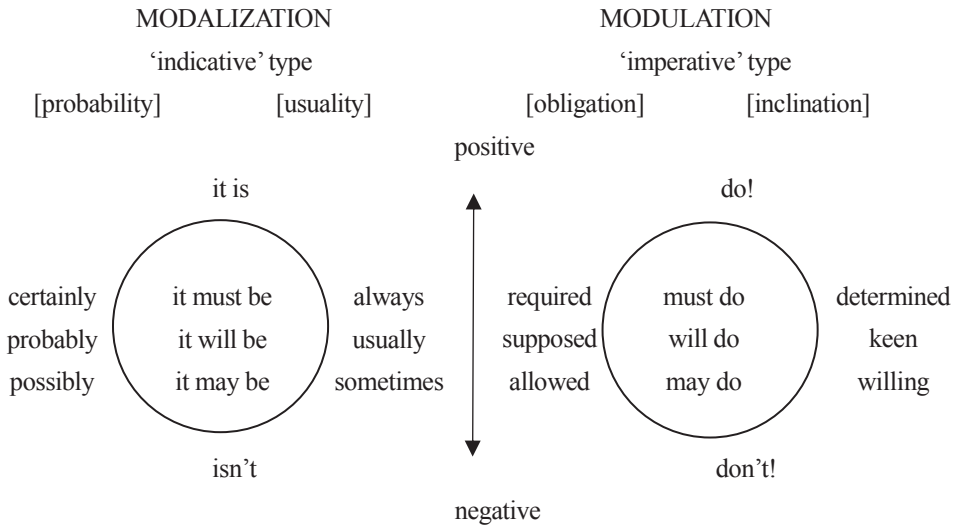
## 2. 英語モダリティと「主観・客観」「明示・非明示」

SFLにおける対人的メタ機能に関わる対人的意味創出のための中心的言語資源としてムード(mood)とモダリティ(modality)がある(Halliday 1985, 1994; Halliday and Matthiessen 2004, 2014; 福田 2014, 2015, 2016 を参照)。特に SFL のムード概念とモダリティ概念の関係については福田(2016)において詳述している。

本稿はムード・メタファーの議論ではなく、モダリティ・メタファーの考察である。福田(2016他)で紹介した通り、SFLにおけるモダリティの定義的説明は「モダリティのシステムの役目は肯定と否定の間に存在する不確定領域の意味を解釈構築することである」とされる(Halliday & Matthiessen 2014: 176。福田 2016: 143における日本語訳の一部)。

次に、福田(2016)他で何度か言及している SFL による英語モダリティの分類図を挙げ、本稿のテーマである対人的メタファーとの関係で検討する。この図はあくまで英語のモダリティに関するものであり、しかも元々提案者のハリデー自身によって、理解の便宜上、単純化を施された図であると考えられる。

(7) SFL における 2 種類の英語モダリティ



(Halliday & Matthiessen 2004: 619)

(7)からわかることは、英語のモダリティは法助動詞の多義的な意味が基盤になっているという点である。そのことが、(7)に「証拠性」(evidential)が含まれていないことの一つの理由の一つだと考えられる。認知的モダリティに近い概念としてモダライゼーション(modalization)があり、義務的モダリティに近い概念としてモジュレーション(modulation)がある。二つの円の中にあるのが法助動詞であり、上から順番に高位、中位、低位の価(value)を示すとされる。ただし筆者としては常にこの三つの価がそろうとは限らないと考えている。これらの法助動詞の意味を法副詞(modal adjunct、本稿では mood adjunct という名称ではなく、ひとまずこのように呼んでおく)や迂言形(periphrastic form)で表したものが二つの円の外側に配置されている。モダライゼーションは「蓋然性」(probability)と「通常性」(usuality)に分けられ、モジュレーションは「義務性」(obligation)と「志向性」(inclination)に分けられる。

ここで注意すべきは、対人的メタファーとの関連で言えば、円の中の法助動詞を用いる表現は「整合形」を示し、つねに「主観的・非明示的」な指向性(orientation)を有するとされている点である。そして、蓋然性の 'certainly' や通常性の 'always' などの副詞は対応する法助動詞のモダリティの意味を「客観的かつ非明示的」に示すものと考えられている。一方、モジュレーションの「義務性」は 'required' など、「志向性」は 'determined' などのいわゆる迂言的な表現が並んでいる。義務性に挙げられた 'required' は人称主語を取るか、それとも非人称の 'it' を取るかによって構文が変わってくる。人称主語の場合、一つの節で 'You are required to do something' のようになり、ハリデーに従うと、そのオリエンテーションは「客観的・非明示的」となる。

一方、非人称主語を取れば、‘It is required that you should do something’ となり、そのオリエンテーションは、「客観的・明示的」となる。一方、「志向性」で挙げられている ‘determined’ や ‘willing’ や ‘keen’ は、モダリティの意味に関しては、人称主語が基本であり、そのオリエンテーションは「客観的・非明示的」となる。

「主観的」オリエンテーションと「客観的」オリエンテーションの区別は次のようである。つまり、当該の節の主語が人称主語であり、かつ法副詞の出現がなければ、「主観的」とされていることである。ハリデーは、法副詞を常に「客観的」オリエンテーションを示すものと考えている。一方「明示」と「非明示」の区別は、単一節内であれば法助動詞の ‘must’ を用いようと法副詞の ‘certainly’ を用いようと、また両者を同時に用いようと、「非明示的」オリエンテーションとして分類される。逆に、節複合の形で主節と従属節からなり、その主節でモダリティの意味が具現され、かつ、モダリティ化の対象となる命題内容が従属節で示される場合が、「明示的」オリエンテーションと分類されるのである。その従属節の主語が人称主語だと「主観的」、非人称主語だと「客観的」とされる。このことを示す例を *IFG 3rd* から挙げておく<sup>(1)</sup>。

- (8) a. Mary’ll know. [Subjective & Implicit]
- b. Mary probably knows. [Objective & Implicit]
- c. I think Mary knows. [Subjective & Explicit]
- d. It is likely Mary knows. [Objective & Explicit]

(Halliday and Matthiessen 2004: 615, Table 10 (7)より)

(8) はモダライゼーションの中位の価である法助動詞 ‘will’ と同様の蓋然性モダリティを担う法副詞の用法と二節から構成される迂言形を示したものである。

### 3. 英語モダリティと対人的メタファー

ハリデーは、当初から、対人的モダリティの存在を指摘して、*IFG 1st* の中で次のように述べている<sup>(2)</sup>。

- (9) There are two main types of grammatical metaphor in the clause: metaphors of mood (including modality), and metaphors of transitivity. In the terms of our model of semantic functions, these are, respectively, interpersonal metaphors and ideational metaphors.

(Halliday 1985: 321、下線強調筆者)

対人的メタファーの一つであるモダリティ・メタファーについてはさらに検討が必要である。本稿はまずハリデーが提示している上の(7)の英語モダリティ分類の中からメタファーの問題を考え、4つのモダリティに対応する日本語のモダリティへの応用可能性について考える。そ

の際、文法的メタファーは、観念構成的メタファーであろうと対人的メタファーであろうと、段階性(gradient)を有するというのが本稿の考え方である。整合形とメタファーとに二分したとしても、整合形とされるものの中に半メタファー的(semi-metaphorical)な中間段階を認めようとする立場である。

英語の法助動詞と法副詞の関係について *IFG 4th* は、法副詞は法助動詞と同じく一つの節内の Mood 領域 (つまり「主語」+「定性」で構成される領域) に位置づけられるとされ、もつとも普通の位置も定動詞の前後であり、Mood システムと緊密に結びついているため、Mood Adjunct と呼ぶのが妥当だとしている。これらの副詞は、「モダリティ」、「時間性」(temporality)そして「強意性」(intensity)を示す副詞であるとされる。そして *IFG 4th* の言う Mood 副詞は「非明示」で「一致的」(本稿で言う「整合的」とされている。すなわち ‘probably’ や ‘usually’ はメタファーではなく、整合形だということになる (Halliday & Matthiessen 2014: 186-187、特に Table 4-10 参照)。Halliday (1985, 1994) と併せて考えると、法助動詞の使用は「主観的・非明示」、法副詞の使用は「客観的・非明示」となる。このことは上の(8)とも一致する。

筆者は第 69 回新潟大学言語研究会 (NULC69、2016 年 11 月 29 日) で「モダリティと文法的メタファー — 蓋然性を中心に — 」で口頭発表の機会を得て、英語のモダリティのメタファー性について、以下のような仮説を提案した。部分的に加筆して(10)に示す。その前に本稿でのモダリティ・メタファーに関する用語とその内容を以下に整理しておく。

- ・整合形(congruent) : 現実世界での事態の在り方に即した自然な言語表現。英語の場合の文法的特徴は法助動詞を用いるという点である。
- ・半メタファー : 整合形とは異なる言語形式で、整合形と類似の意味を表す表現。その意味は整合形より一段階客観化される。文法的特徴は、単一の節(single-clause)からなる表現であること。英語の場合、法助動詞以外の表現手段を用いる。迂言的表現や法副詞の単独使用がここに分類される。
- ・メタファー : 整合形とは異なる言語形式で、整合形と類似の意味を表す表現。その意味は半メタファーよりも一層客観化される。文法的特徴は、二節(bi-clause)からなる表現であること。英語の場合、法助動詞以外の表現手段を用いる。

(10) 英語のモダリティのメタファー度に関する仮説 (蓋然性の場合)

整合形は少なくとも一つ、メタファー性は段階を持つと仮定する。

1. 整合形 (主観的・非明示的) It must be true. (法助動詞を含む形が英語の場合、もつとも congruent だと考える) (Certainly it must be true は congruent と考えておく)
2. 半メタファー形 (客観的・非明示的) It is certainly true. / It certainly is true.
3. 半メタファー形 (客観的・非明示的) It is certain to be true.
4. 半メタファー形 (客観的・非明示的) Certainly it is true. / It is true certainly.



（‘certainly’ は、文頭では対人的主題として卓立的 / 文末では afterthought）

5. 半メタファー形（客観的・非明示的）It is believed to be true.

6. メタファー形（主観的・明示的）I believe that it is true.

7. メタファー形（主観的・明示的）I am certain that it is true.

（6と7は「私」が話題的主題になっている）

8. メタファー形（客観的・明示的）It is certain that it is true.

9. メタファー形（客観的・明示的）The certainty that it is true could not be denied.

（モダリティが話題の主題になっている。）< 研究社『新編・英和活用大辞典』  
の ‘certainty’ の項を参考に作例したもの >

10. メタファー形（客観的・明示的）There is an undeniable certainty that it is true.

（モダリティが存在過程の存在物として焦点化している。）<9と同様>

#### 4. 日本語のモダリティとメタファー性 — 蓋然性の場合

まず、上の(10)を日本語に直しながら、日本語の蓋然性モダリティの整合形、メタファー形を検討する。

(11) 日本語のモダリティのメタファー度に関する検討（蓋然性モダリティの場合：上の(10)の和訳を通して）

整合形は少なくとも一つ、メタファー性は段階を持つと仮定する。

1. 整合形（主観的・非明示的）「それは本当に違いない。」（法助動詞を含む形。もっとも整合的（congruent）だと考える）（「きっとそれは本当に違いない」も単一モダリティの強調形と捉えて整合的と考える）
2. 半メタファー形（客観的・非明示的）「それはきっと本当だ。」法副詞単独の場合である。「きっと」を語順の中位に用いている。（cf. It is certainly true.）
3. 半メタファー形（客観的・非明示的）「それはきっと本当だ。」  
日本語では、2との区別なし。（cf. It is certain to be true.）  
あえて、語順に基づく近似訳にすれば「それは確かだ。本当という点で」となり、不自然さを伴う。
4. 半メタファー形（客観的・非明示的）「きっと、それは本当だ。」 / 「それは本当だ、きっと。」この場合は、英語と並行性がある。（「きっと」は、文頭で対人的主題として卓立的 / 文末では afterthought）
5. 半メタファー形（客観的・非明示的）「それは本当だと信じられている。」
6. メタファー形（主観的・明示的）「(わたしは) それが本当だと信じる。」
7. メタファー形（主観的・明示的）「(わたしは) それが本当だと確信している。」

（番号6と7は「わたし」が話題の主題になっている。日



本語では「わたし」は多くの場合、表現されない。）

8. メタファー形 (客観的・明示的) 「それが本当だということは確実だ。」日本語では「こと」や「ということ」や「の」で名詞節を作ることができる。
9. メタファー形 (客観的・明示的) 「それが本当である確実性は否定できないだろう。」  
(モダリティが話題的主題になっている。)
10. メタファー形 (客観的・明示的) 「それが本当であるという否定できない確かさが存在する。」(モダリティが、存在過程の存在物として、焦点化されている。)

上例で特に興味深い点は、(10)と(11)の番号4での日英両言語の表現形式の一致である。さらに重要な点は、番号9と10における日英語の一致である。当該の日本語が翻訳調であるため、一致するのは当然とも言えるが、この一致が示唆することは、明治以降の日本語が英語など西洋の言語の直訳的翻訳を通して、より「客観的」「科学的」「論理的」な表現形式を取り入れて定着させてきたというプロセスである。まさに番号9と10は英語にとっても、日本語にとっても、半メタファーを超えて、高度に発達した真正のモダリティ・メタファーであり、対人的メタファーである。

## 5. 日本語のモダリティと対人的メタファー — 「通常性」「義務性」「志向性」の場合

福田(2016)は、Teruya(2007)や益岡(1991, 2007)や澤田(2006)を参照しつつ、SFLに基づく9種類の日本語モダリティを以下のように提案している。

### (12) SFLに基づく日本語モダリティの分類

#### ○モダライゼーション・モダリティ

- 能力性 「することができる」「れる、られる」
- 証拠性 「らしい」「ようだ」「そうだ」「みたいだ」
- 蓋然性 「にちがいない」「だろう」「かもしれない」
- 通常性 「こともある」「場合がある」

#### ○モジュレーション・モダリティ

- 必要性 「しなければならぬ」「しなくてはいけない」
- 義務性 「べきだ」
- 許可性 「してもいい」
- 期待性 「すればいい」「したらいい」「するといい」
- 志向性 「したい」「するつもりだ」「する気である」

(福田 2016: 166 参照)

本稿では、(12)のうち「通常性」「義務性」「志向性」に絞り、高位・中位・低位の価の区別に拘

らず、特徴的な部分のみを取り上げる。それ以外のモダリティ項目については別の機会に検討することにする。

#### A. 通常性

モダライゼーションの一つである「通常性」は SFL 独自の概念である。肯否両極の中間領域の意味を表すという点でモダリティに分類される。直接的に通常性を示す英語法助動詞としては、‘will’（現在の習慣）‘would’（過去の習慣）であろう。‘can’（「することもある」という可能性）も通常性に入れてよい。次の例の英語を見て、それに対応する日本語を考えてみたい。上の(7)の図を参照されたい。通常性の具体的表現は頻度副詞を伴うことが多い(英語の例文は『ジーニアス英和大辞典（電子辞書版）』を参考にしている)。

(13) a. She is usually studying very hard. (整合形)

b. It is usual for her to study very hard. (半メタファー形)

c. It is usually true that a happy childhood sets the scene for a happy future. (メタファー形) (『ジーニアス英和大辞典（電子版）』)

英語の場合、「通常性」の形容詞は‘It is usual that --’のような外置構文や、‘It is sometimes that --’のような頻度副詞が分裂文の焦点になる例はこのままの形式だとまれだと思われる。一方、(13c)は興味深い例である。(13c)は通常性という概念が、SFLにおいてモダリティに認定される根拠を明確に示す例である。ある命題の真偽に関して肯否中間段階的意味を頻度副詞で調整する表現となっている。次に日本語の場合を見てみよう。

(14) a. 「彼女は猛勉強することがある。」(整合形:「～ことがある」だけで「通常性モダリティ」を表すことができる。ここでは、「～ことがある」が全体として通常性を示す一つの法助動詞相当になっている。日本語では、英語の法助動詞のような一定の形式と文法特性を共有する単一カテゴリーを設定するのが簡単ではない。上の(12)における9種の日本語モダリティ表現を見られたい。そこでは、その語形成の在りようが多種多様である。)

b. 「彼女は時々猛勉強することがある。」(整合形:「～ことがある」に頻度副詞が加わった形である。この種の表現も整合形とみなす)

c. 「彼女は時々猛勉強する。」(半メタファー形: 法副詞だけの場合は、半メタファーとする。ただし、実際の使用頻度の問題ではない点に注意。)

d. 「彼女が猛勉強するのはいつものことだ。」(メタファー形、日本語の「～するのは～だ」構文である。通常性を示すモダリティ「いつも」が、節末におかれて焦点化している。)

B. 義務性

まず英語の場合からみてみよう。

(15) a. You must finish your homework by next Wednesday. (整合形)

b. You are required to finish your homework by next Wednesday. (半メタファー)

c. It is required that you should finish your homework by next Wednesday. (メタファー)

(15a, b, c)それぞれの意味の違いは微妙である。しかし文をどの要素から作り始めるかという SFL で言う主題選択(Thematic Choice)が異なる。(15b)の主題は(15a)同様 ‘you’ である。このことから(15a)(15b)とも「あなた」に関して何かを述べている。一方(15c)は非人称の ‘it’ を導入的な主題に選ぶことによって、「あなたの行為全体」について一般的な事態を客観的に述べる文となっている。このように主題選択が関与するということは、モダリティという対人的メタ機能を具現する文法概念が文の前後関係などに基づく主題選択というテキスト形成的メタ機能にも深く関わっていることを示している。この点は、上の(10)から(14)までのすべての例に関して言えることである。

さらに整合形が半メタファー形やメタファー形になる場合、過程構成における過程型（つまりプロセスタイプ）が変化することがある点に注目したい。たとえば、上の(15a)は「宿題を終える」という「物質過程」だが、(15b)は「～するよう義務づけられている」というふうの状態を表す「関係過程」に変化している。このことは、モダリティという対人的メタ機能概念が過程型という観念構成的メタ機能と関係していることを示している。このような現象は、言語においては三つのメタ機能が同時に具現するという SFL の主張を裏付けるものである。では「義務性」に関する日本語の例を見てみよう。

(16) a. 「君は来週の水曜までに宿題を終えなければならない。」(整合形)

b. 「君は来週の水曜日までに宿題を終えるように義務づけられている。」(半メタファー形)

c. 「君がしなければならないことは、来週の水曜日までに宿題を終えるということである。」(15c の語順に基づく近似的訳) (メタファー形)

d. 「君が来週の水曜日までに宿題を終えるのは義務である。」(メタファー形：(14d)同様、日本語は「～するのは～だ」というモダリティの題述的焦点化(Rhematic Focalization)が容易である。英語にもこれに類似の表現があるが、ここでは省略する。)

C. 志向性

まず英語の場合の「志向性」モダリティを見てみる。

- (17) a. He **will** help you with your homework. (整合形、will に強勢)  
b. He is willing to help you with your homework. (半メタファー形)  
c. He is willing for his daughter to marry you. (半メタファー形)  
d. He is willing that his daughter should marry you. (メタファー形)  
e. His help with your homework comes from his willingness. (メタファー形)

上の「はじめ」の節の(3)でハリデーが述べているように、整合形か否かは、決して頻度の問題ではない。また、本稿の立場として、英語のモダリティ表現の整合・不整合 (congruent/incongruent) は法助動詞あるいは準法助動詞を用いると整合形、それを用いていなければ不整合形 (すなわち半メタファー形かメタファー形) とみなすことを再度確認しておく。では、次に日本語の「志向性」モダリティを見てみる。

- (18) a-1. 「私は彼女の宿題を手伝います。」(叙述ムードからの「ムード・メタファー」として含意的・派生的に生じる「申し出・志向」の発話機能(speech function)と解釈できる)  
a-2. 「私は、彼女の宿題を手伝いたい。」(整合形：現場性の高い表現「～したい」は人称制限があり、心理形容詞と同様、一人称主語しか使えない。)  
b. 「私は、彼女の宿題を手伝いたいと思う。」(メタファー形：「～したいと思う」は高頻度の表現である)  
c. 「私には、彼女の宿題を手伝う気がある。」(メタファー形：「気がある」は存在過程)  
d. 「彼女の宿題を手伝うのは私自身の意向である。」(メタファー形：「志向性」の焦点化)

(18b)と(18c)は使用頻度の高い表現である。ここでそれらをメタファー形としたのは、それらが二節から成り立っていると考えられるからである。「～たいと思う」「～する気がある」を全体として「志向性」を示す法助動詞的表現であると捉えると、これらは整合形になる。この点は今後の検討課題としたい。

## 6. むすび

本稿では、ハリデーの言う整合形を「整合形」と「半メタファー」に分けた。メタファー形式を二分したと言うよりも、単一節内の表現を整合形と半メタファーに分けると言うほうがより適切である<sup>(3)</sup>。

整合形は「発話現場」での話者の態度を直接表明する力を持つが、半メタファーとメタファーはその効力が弱まる。例えば、英語の「入ってもいいよ」は“Come in (please)! ”という命令ムードを用いることが多いが、現場性の高い文脈で「許可」を与える時には、整合形モダリティ “You may come in.” も可能である。一方、半メタファー形モダリティの “You are allowed to

come in.”は「許可されているという事態」をより客観的に述べる表現であり、現場的な直接指示行為としては有標的であると考えられる。

観念構成的メタファーとモダリティ・メタファーの両者に共通しているのは「客観性」と「論理性」がその使用の主要な動機であるという点である。特に観念構成的メタファーにおいては当該の節の数が一つの節かあるいは二つの節かということは、整合形とメタファーを分かち上で、まったく基準にされていない。他方、対人的メタファーの場合、SFLでは節が一節か二節を基準としている。本稿では一節中に半メタファーを設定している点で、SFLのこれまでの分析と異なる。

本稿での議論を通じて、日本語にも整合形、半メタファー形、メタファー形の概念が適用できることが明らかになった。ただし、日本語の場合の整合形は法助動詞の使用を単一の基準にするのではなく、現実の自体に言語がどれだけ即しているかという「自然性」を基準にすべきだということも分かった。

最後に、モダリティという対人的メタ機能に関わる言語現象においても、観念構成的メタ機能に関わる過程型の変化やテキスト形成的メタ機能に関わる主題選択などが関与することが確認された。

今回は4種のモダリティの検討にとどめたが、日本語の残る5種のモダリティについては機会をあらためて考察の対象としたい。

#### (付記)

本研究の一部は、平成28年度の科学研究費・基盤研究(C)「機能文法の枠組みによる日本語モダリティー研究」(代表：角岡賢一)の助成を得て行われたものである。

#### 注

- (1) 次の(8)の各例により、従来からのSFLにおけるモダリティの「整合性」と「メタファー性」の区別は、「整合形 Subj.」「整合形 Obj.」「メタファー形 Subj.」「メタファー形 Obj.」のようになっていることがわかる。
- (2) メタファー的意味の字義的意味への解凍(unpacking)は、「不自然」な表現から「自然」な表現へと向かう。このことは、上の例(4)(5)などの観念構成的メタファーについては容易に理解できる。当然、対人的メタファーもこの原則に従うことになるが、さらに具体的な例を検討し、理論の深化と整理を図る必要がある。
- (3) 本稿は、「整合形」の中に「半メタファー形」を認めたが、それを「半整合形」とは呼ばないことにする。その理由は、「半メタファー形」が一段階「メタファー形」の方向に踏み出している表現であると捉えるからである。

## 参考文献

- 福田一雄 (2003) 「文法的メタファーとは何か - M.A.K. ハリデー (1994) 第 10 章をめぐる - 」『新潟大学英文学会誌』 29 号、pp.34-54.
- 福田一雄 (2012) 「選択体系機能言語学(SFL)から見たモダリティ」秋 孝道 (編著)『言語類型の記述的・理論的研究』新潟大学人文学部 pp.115-133.
- 福田一雄 (2014) 「日本語モダリティ覚え書き (その一)」『言語の普遍性と個別性』 第 5 号、新潟大学大学院現代社会文化研究科 pp.1-13.
- 福田一雄 (2015) 「日本語モダリティ覚え書き (その二) - ムードとモダリティの区別 - 」『言語の普遍性と個別性』 第 6 号、新潟大学大学院現代社会文化研究科 pp.1-18.
- 福田一雄 (2016) 「機能文法での叙法体系・モダリティの定義」角岡賢一 (編著) 五十嵐海理・飯村龍一・福田一雄・加藤澄 (著)『機能文法による日本語モダリティ研究』東京：くろしお出版 pp.113-172.
- 福田一雄 (2017 発行予定) <研究ノート> 「機能文法に基づく日本語モダリティの分類 - その理論的基礎と今後の課題 - 」『龍谷大学 国際社会文化研究所 紀要』 第 18 号.
- Halliday, M. A. K. (1970) "Functional diversity in language as seen from a consideration of modality and mood in English," in *Foundations of Language: International Journal of Language and Philosophy*, 6, pp.322-61 (Reprinted as Chapter 5 in *Studies in English Language*, the Collected Works of M. A. K. Halliday, Vol.7. London & New York: Continuum. pp.164-204.)
- Halliday, M. A. K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar*. 1st Ed. London: Arnold.
- Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*. 2nd Ed. London: Arnold. ハリデー M. A. K. 著、山口 登・笈壽夫 (訳) (2001) 『機能文法概説 - ハリデー理論への誘い - 』東京：くろしお出版.
- Halliday, M. A. K. & Christian M. I. M. Matthiessen (2004) *An Introduction to Functional Grammar*. 3rd Ed. London: Edward Arnold.
- Halliday, M. A. K., Revised by Christian M. I. M. Matthiessen (2014) *Halliday's Introduction to Functional Grammar*. 4th Ed. London and New York: Routledge.
- 加藤 澄 (2016) 「テキスト分析の中で対人的言語資源を考える」角岡賢一 (編著) 五十嵐海理・飯村龍一・福田一雄・加藤澄 (著)『機能文法による日本語モダリティ研究』東京：くろしお出版 pp.229-293.
- Martin, J. R. (1992) *English Text: System and Structure*. Philadelphia & Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』東京：くろしお出版.
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探求』東京：くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003) 『現代日本語文法 4』くろしお出版.
- 澤田治美 (2006) 『モダリティ』東京：開拓社.
- Teruya, Kazuhiro (2007) *A Systemic Functional Grammar of Japanese*. Volume One. London: Continuum.